

九州電力の原発がすべて止まっても、電気は足りています

2011年10月

九州電力は2011年7月15日、「今夏の需給状況について」というプレスリリースで(九州電力ホームページ掲載)、「玄海原子力2・3号機と川内原子力1号機の運転が再開できない場合、夏季ピーク時に供給予備力が4.0%まで低下します。」と公表しました。しかし、以下の表で明らかとなり九州電力は十分な供給力を有しており、この夏の最大電力需要は1,544万kW(2011年9月1日、九電)でしたが電力需給は逼迫しませんでした。

また、2012年夏には全ての原発が停止していることが想定されますが、現在計画停止中の唐津2・3号火力(計87.5万kW)と大分1・2号火力(計50万kW)を稼働させ、苅田新2火力(37.5万kW)のH23年度廃止時期を延長して発電設備をフル稼働すれば、供給予備力は84.2万kW、予備率5.0%となります。最大電力需要が今年と同じだとすれば、供給予備力は224.2万kW、予備率14.5%です。九州電力が原発を全て停止させても、供給余力が十分にあることは明らかです。

野田首相の「原発への依存度を下げる」社会づくりへ向け、九州電力は短期間で建設・稼働できるガスタービン発電を直ちに増設し、再生可能エネルギーやガスコンバイン発電などを拡大することにより電力の安定供給を図る責任を果たすべきです。社会全体の省エネをあわせて推進すれば、市民生活の面でも企業・産業活動の面でも原発に頼る必要はありません。

【表中の単位万kW】

		2011年夏 一原発一部稼働一			2012年夏 一全ての原発停止一			備考
最大電力需要① (注1)		H23年度 九電供給計画		九電 公表値と 設備量 との差	H23年度 九電供給計画	H23最大需要 (2011.9.1)		
		1,669				1,684	1,544	
供給力	内訳	九州電力 公表値	発電設備量 (注2)	原発稼働 見込み 電源別 未公表	H23年度 供給計画	資源エネルギー庁 発電設備量(注1)		
	原子力②	250	262.9 (注3)		12.9	0	0	2011年夏は、玄海1号(55.9)、玄海4号(118)、川内2号(89)の合算で262.9。 2012年夏は、全ての原発の停止が予測されるので0。
	水力③	312	327.9		15.9	327.9	327.9	九電ホームページでは、揚水発電・一般水力に区別されていたが、その内訳は公表されず。
	火力④	897	1157.7 (注4)		260.7	1157.7	1157.7	九電ホームページでは、石油・LNG・石炭に区別されていたが、その内訳は公表されず。
	地熱など⑤	16	21.6 (注5)		5.6	21.6	21.6	
	九電合計⑥	1,475	1770.1		295.1	未公表	1507.2	②+③+④+⑤
	他社受電⑦	261	261		—	未公表	261	九電が購入している会社名は公表されず。(注6)
	合計⑧	1,736	2031.1		295.1	1,908	1768.2	⑥+⑦
供給予備力⑨		67	362.1	—	224	84.2	224.2	⑧-①
供給予備率		4.0%	21.7%	—	13.3%	5.0%	14.5%	⑨÷①

注1) 最大電力需要の「H23年度供給計画」1,669万kWは最大需要発生日の最高気温34.2℃と想定。(九電HP)

注2) 「発電所認可出力表」(2011年6月、資源エネルギー庁電力調査統計)より。発電設備量に「苅田新2火力(2010年4月から停止:37.5万kW)と

大分1・2火力(2002年度から計画停止:25+25万kW)、唐津2・3火力(2004年度から計画停止:37.5+50万kW)の計175万kWは計上されている。」(電力市場整備課)

注3) 原子力発電所の2011年夏の設備量(認可出力)は525.8万kWだが、玄海1・4号と川内2号(2011年9月1日から定期検査入り)の計262.9万kWを計上。

注4) 「火力」の内訳は、汽力1118.2万kW、ガスタービン0.3万kW、内燃力39.2万kW。

注5) 「地熱など」の内訳は、地熱21万kW、風力0.3万kW、太陽光0.3万kW。

注6) 「他社受電」の内訳は、九州電力が経営情報だとして秘匿しているため不明だが、卸電気事業者[Jパワー(電源開発)と日本原電]が中心で、一般電気事業者[中国電力などの他の電力会社]や特定電気事業者、特定規模電気事業者は少ないと見込まれる。

お問い合わせ先 川内原発増設反対鹿児島県共闘会議《電話 099-252-8585》